

絶望と希望の間に。

放送大学客員准教授 川中 大輔

日本社会は少子高齢化に伴う歪な人口構成のもとで人口減少を迎えており、財政の収支均衡を保ち難い状況にある。加えて、社会インフラの老朽化に伴う更新等の費用は今後高まる一方で、従来の水準での政府サービスの維持は期待し難いものと考えられている。こうして福祉国家の危機が指摘され、「地域共生社会」といった社会像が提起されるなどして、福祉国家再編の必要性が唱えられるようになって久しい。各種社会保障制度の将来についても不安視されて久しい。日本社会の「これから」を語る際、ある意味では「暗い未来」が予見されていると述べても過言ではない。

しかし、多くの人々がこうした危機を切実なものとして認識しているとは思われない。何となく分かっているが、AIに代表される科学技術の発展を契機とする「大きな変化」や東京オリンピック・パラリンピックや大阪万博などの「大きな祝祭」を起爆剤とする好況が起こって、どこかで「何とかなるのだろう」という淡い希望を持っている人が少なくないのではないだろうか。阿部潔（2018：212-214）は、戦後日本の社会変容と未来／希望の関係を分析し、「失われた20年」以降の長期にわたる日本社会の閉塞感から変革が困難であることを十分自覚しつつも、「未来に希望がある」こと自体を希望するという「希望への希望=〈希望〉」を漠然と求める心性が広がっているのではないかと指摘している（表1）。「何とかなるだろう」という言葉には、変革の先にあるビジョンも変革の戦略／方策も欠いており、まさに〈希望〉から出てくる空虚な期待に他ならない。

では、なぜそのような実体のない〈希望〉で安穏としておれるのだろうか。宮台真司（2003：165）は「存在すべき絶望が存在せずに、ヌルい失望のようなものしか存在しない」ことを問題視している。日本社会の「暗い未来」の訪れを感知しつつも直視／正対できていないから、「これまで」の経験をもとにした小手先の対応で「何とかなるだろう」と思っているのではないかということである。私たちが未来を語る時、足りていないのは希望ではなく「絶望」なのである。だが、社会に絶望などしてしまえば、沈没しかかっている船から人が逃げ出すように、問題を直視／正対するどころか目を背けて脱出を図ることを促すのではないかと懸念されるだろう。確かに失望の先にある絶望は無気力を生む。ここで書いている「絶望」はそのような失望の先にあるものではない。希望の先や前にあるものである。

真に「絶望」できるということは、実は希望を抱いている裏返しでもある。無感情／無関心であれば、絶望も希望もない。「暗い未来」を直視／正対することで醸成された絶望感／危機感をバネにして「だからこそ、このような戦略／方策によってオルタナティブな未来を実現しなければならない」と語られるような硬質な希望を取り出していく回路もあるはずだ。そのためには、幻想や祝祭で演出された〈希望〉に酔いしれずに、「絶望」の徹底から紡がれる希望を分かち合う場が求められている。そして、その場から立ち上がるコミュニティでラディカルな社会イノベーション実践を創出することが求められているのである。

参考文献

- 阿部潔, 2018, 『『2020』から『1964』へ--東京オリンピックをめぐる〈希望〉の現在』, 小路田泰直・井上洋一・石坂友司編『〈ニッポン〉のオリンピック--日本はオリビズムとどう向き合ってきたのか』青弓社, pp.192-216.
- 宮台真司, 2003, 『絶望から出発しよう』ウェイツ.

表1 戦後日本の社会変容と未来／希望

年代	区分	「未来」の位置付け	希望への関係
1945-1960	理想の時代	来たるべきこれから (未来での実現可能性)	希望への信望
1960-1975	夢の時代	ありうべきこれから	希望への願望
1970-1995	虚構の時代	いかようにでもあるこれから (反現実としての現在の同時平行性)	希望への絶望
1995-現在	不可能性の時代	行くあてなきこれから	希望への希望 =〈希望〉

出所：阿部(2018)をもとに筆者作成